2026 年 10 月 29 日

立教大学国際学術研究交流制度

2026 年度「派遣研究員」報告書

１．派遣概要

所属･職	経済学部・助教 B
氏名	山本　翔平
派遣機関名	Department of Economics and Business, Universitat Pompeu Fabra 所在国：スペイン
研究テーマ	「文脈を無視した測定の限界を越えて：日本と米国における文脈依存的経済行動の可視化」
派遣期間	2026 年 9 月 1 日～2026 年 9 月 29 日（29 日間）
研究経費	742,200 円

２．派遣期間中の活動

離日日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例）○○に関する調査、○○氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2026 年 9 月 1 日	離日（成田→マドリード)。
2026 年 9 月 2 日	マドリードからバルセロナへ移動。2026 European Meeting of the Economic Science Association（ポンペウ・ファブラ大学・BESLab 主催）に参加登録。
2026 年 9 月 3 日	同学会に参加し、時間選好・リスク選好に関する研究報告を聴講、研究者と意見交換。
2026 年 9 月 4 日	同学会のセッション「Risk and Time」にて、研究報告 "Risk Dilutes Time, Time Dilutes Risk: Testing the Cross-Modal Effect in Incentivized Monetary Choice" を行い、同セッションの座長を務めた。
2026 年 9 月 5 日	同学会に参加し、研究者と意見交換。
2026 年 9 月 7 日～9 日	派遣先（受入教員: Daniel Navarro 教授）の研究室にて、日米比較研究の論文改訂およびセミナー報告の準備。
2026 年 9 月 10 日	John Duffy 教授（カリフォルニア大学アーバイン校）と研究討議。オンライン学習におけるピア効果に関する論文の理論モデルについて助言を受けた。
2026 年 9 月 11 日	前日の研究討議を踏まえ、同論文の理論部分を改訂。

2026 年 9 月 17 日	派遣先のセミナーにて研究報告 "Attentional Dilution: How Attributes Compete for Weight in Risky and Intertemporal Choice"（質疑を含む 75 分枠）。参加者から十数件の質問・コメントを受けた。
2026 年 9 月 18 日	Jose Apesteguia 教授（ICREA・ポンペウ・ファブラ大学）と研究討議。同論文の理論モデルの位置づけについて助言を受けた。
2026 年 9 月 19 日～23 日	派遣先にて、セミナーおよび研究討議で受けたコメントを踏まえた追加分析と論文改訂。
2026 年 9 月 24 日	Apesteguia 教授の指導学生である Raquel Lorenzo 氏（ポンペウ・ファブラ大学博士課程）と研究討議。社会規範への同調を含むモデルについて議論し、関連研究の紹介を受けた。
2026 年 9 月 25 日～26 日	前日の研究討議で紹介を受けた研究を踏まえ、同論文を改訂。
2026 年 9 月 27 日	バルセロナからマドリードへ移動。
2026 年 9 月 28 日～29 日	マドリード発、帰国（9 月 29 日 成田着）。

３．研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

本派遣の目的は、時間選好の測定が「比較の文脈」に左右されるという問題を、日本と米国のデータを用いて明らかにすることであった。経済学では、人がどれだけ将来を割り引くかを、同じ種類の財を「今」と「将来」で比べさせて測るのが標準である。しかし報告者らのこれまでの研究では、比べる二つの選択肢が時間だけでなく種類も異なるとき（例：今日のペンと 2 か月後のチョコレート）、人ははるかに辛抱強くなる。報告者らはこれを cross-modal 効果と呼び、その背後にある仕組みとして、選択肢を区別する属性が増えるほど一つ一つの属性に向けられる注意が薄まるという「注意の希薄化（attentional dilution）」を提案してきた。この効果が正しければ、文脈を無視して測られた割引率は、現実の意思決定における辛抱強さを誤って評価していることになる。

派遣期間中は、この研究プログラムを欧州の行動・実験経済学者に向けて 2 回報告した。第一に、派遣先のポンペウ・ファブラ大学で開催された Economic Science Association の欧州大会において、金銭の異時点間選択に確率の違いを組み込むことで cross-modal 効果の大きさを推定できる新しい実験デザインを報告し、同セッションの座長も務めた。第二に、派遣先のセミナーにて、日米で約 1,900 名が参加した比較実験、財のカテゴリーの違いを操作した実験、視線計測実験、多属性の選択課題という一連の証拠をまとめて報告した。日米比較では、cross-modal 効果は両国で一貫して観察され、日本の回答者の方が全体として辛抱強い一方で、効果の大きさに国による違いは見られなかった。

これらの報告では、実験の統制条件の解釈、注意の希薄化が属性の数に対してどのような形で生じるか、選択の複雑さが結果を説明してしまう可能性などについて、具体的な批判と提案を受けた。特に、選択の複雑さについては、既に収集したデータで選択の一貫性や選好逆転を調べることで検証できるという方向で議論がまとまり、帰国後の分析計画に組み込んだ。また、受けたコメントを日米比較論文の改訂と、金銭の異時点間選択を用いた次の実験の事前登録に反映させている。

セミナーとは別に、派遣先で 3 名の研究者と個別に研究討議を行った。対象は、報告者が

投稿準備を進めていた、オンライン学習において他の学習者が途中でやめるか最後までやり遂げるかが本人の学習努力に非対称な影響を与えることを示した論文である。カリフォルニア大学アーバイン校の John Duffy 教授からは、理論モデルが説明しようとする非対称性をモデル自身が仮定してしまっているという指摘を受け、モデルの位置づけを見直した。派遣先の Jose Apesteguia 教授からは、モデルをデータを整理する枠組みとして位置づけ、期待に基づく参照点依存の観点から論じるべきとの助言を受けた。さらに同教授の紹介により、博士課程の Raquel Lorenzo 氏と社会規範への同調を含むモデルについて議論し、その内容を論文の拡張モデルと新たな予測に反映させた。他者の行動や事前の期待という文脈によって経済行動が変わるという点で、いずれの討議も本派遣のテーマと直結するものであった。

今後は、金銭の異時点間選択を用いた実験を実施して cross-modal 効果の大きさを推定し、文脈を考慮した時間選好の測定方法を提案することを目指す。成果は国際学術誌への投稿と国内外の学会報告を通じて公表する予定である。

最後に、本派遣の機会をいただいたリサーチ・イニシアティブセンターの皆様、受け入れていただいたポンペウ・ファブラ大学の Daniel Navarro 教授と経済・経営学部の皆様、研究討議に応じていただいた皆様に、心より御礼申し上げます。